

平成 30 年度学校教育自己診断 アンケート結果集約

◎平成 30 年度学校教育自己診断の実施対象・時期・回収枚数について

対象	アンケート実施期間	回収枚数
児童・生徒	11/5 ～ 11/9	59 枚
保護者	11/24 ～ 12/10	11 枚
大阪整肢学院職員	10/29 ～ 11/9	59 枚
本校教職員	10/29 ～ 11/9	59 枚

◎質問内容と肯定的な回答の割合

質問分類	質問内容	児童 生徒	保護 者	学院 職員	教職 員
①学校に対する意識	学校は楽しい。楽しみにしている。	87%	100%	86%	98%
②生徒指導に関する意識	カウンセリングマインドを取り入れた生活指導を行っている？	—	—	—	53%
③進路指導に関する質問	将来について考えたことがあるか。	62%	—	—	—
	適切な進路指導を行っている。	—	70%	28%	65%
④教育相談に関する質問	自分の考えや思いを話せる先生がいる。	74%	—	—	—
	児童生徒が担任以外に相談できる体制がある。	—	—	—	69%
⑤道徳・人権教育に関する質問	友だちは大切・好き。	88%	—	—	—
	命の大切さ、ルール、マナーを学んでいる。 学校は命を大切に作る心やマナーを守る態度を育てていると思うか？	69%	—	—	—
⑥学校行事に関する質問	学校行事は楽しい。魅力を感じている。	94%	100%	63%	84%
	先生が好き。	88%	—	—	—
⑦障がい理解に関する質問	先生はあなたの気持ちを理解している。	75%	—	—	—
	指導内容・指導方法を工夫・改善している。	—	—	—	91%
	個別の教育支援計画は活用されている。	—	—	—	77%
⑧学習指導に関する質問	学校は子どもの障がいを理解している。	—	70%	41%	—
	勉強は楽しい。	93%	—	—	—
	授業は分かりやすい。 授業で児童生徒の力を伸ばせている。	88%	—	—	—
⑨情報提供に関する質問	学校は子どものニーズに合った教育を行っている	—	80%	29%	—
	学校と学院連携して子どもの支援に当たっている。	—	70%	38%	33%
⑩学校組織に関する質問 (学校職員用)	学校・学院・保護者と情報交換ができている。	—	60%	41%	45%
	教育活動について日常的に話し合っているか？	—	—	—	83%
⑪いじめに関する質問	各学部・分掌の連携はうまく行われているか？	—	—	—	47%
	学校運営に個々の教職員の意見が反映されている？	—	—	—	29%
	小中高の一貫教育が行われていると思うか？	—	—	—	32%
	いじめが起これば学校は真剣に対応すると思う。	69%	70%	47%	57%

課題と今後に向けて

- ・学校に対する意識では、児童生徒、学校職員、保護者、整肢学院職員ともに高く、児童生徒のほとんどが学校に行くのを楽しみにしていることがうかがえる。
- ・学校職員に対する、カウンセリングマインドを取り入れた生活指導については、7割の学校職員が行っていると回答し、肯定的評価が上がった。
- ・進路指導に関する質問では、児童生徒Aの意識が42%と半数以下だが、児童生徒Bでは8割の児童生徒が将来のことについて考えたことがあると答えている。また保護者も86%が肯定的に捉えている。しかし、学校職員で、適切な指導を行っていると考えている者は56%、整肢学院職員は20%にとどまり、学校職員・保護者に比べ、整肢学院職員は学校が適切な進路指導を行っていないと捉えていると思われる。
- ・教育相談に関わる質問では、今年度も児童生徒、学校職員共に肯定的評価が比較的高い。
- ・道徳・人権教育に関する質問では、児童生徒学校職員保護者が8割以上の肯定率なのに対し、整肢学院職員の肯定的評価は3割を切っており、学校職員・保護者と整肢学院職員の間大きな開きがある。
- ・障がい理解に関する質問では、児童生徒・学校職員・保護者の数値に比べ、整肢学院職員の肯定的評価は低く『障がい理解が不十分』と整肢学院職員の三分の二が感じている。
- ・学習指導に関する質問では、児童生徒・学校職員・保護者からは高く、整肢学院職員からの評価は低い。
- ・学校職員に対する学校組織に関する質問では、小中高の一貫教育に対する数値が上がっており、学校運営に個々の教職員の意見が反映されていると感じている教職員が増えている。一方で、教育活動の改善に関する質問では、評価が一昨年度並みの6割台まで下がった。
- ・いじめの対応に関する質問では、児童生徒・保護者・学校職員に比べ、整肢学院職員の肯定的評価の数値が低い。
- ・ここから見えてくる課題は、児童生徒・保護者・学校職員に比べ、整肢学院職員からの学校への評価が全般的に低いということである。これからも、地道に学校職員と学院職員が持つお互いの専門性を交流し合い、情報交換や声かけを大事にして、お互いの理解を深めていく努力をさらに進める必要がある。